

つて構圖を詳かにしないが、内區の一部から推定すると、この部分には、圓坐乳の間に疾驅せる獸形を現はせるものゝ様である。次に蒲鉾狀の銘帶がある。

大伴氏  
凡河内國造彦已蘇  
根命  
衣縫女  
在原業平

以上六面の古鏡は、一々の解説で明かな様に國内産のものでなく、中國よりの舶載品である。本古墳に葬られた主に就ては、大伴氏の祖先であると言ひ、凡河内國造彦已蘇根命であると稱して歸決してないが、にわかにかし難い。又前掲の俚謡からして衣縫女に結び付けんとし、あるいは在原業平に關係付けようとするが、何れも根據薄弱である。要するに特定人にあることは、今暫く差控えねばなるまい。

寶積寺

智嚴和尚

宗海和尚

この塚を供養すると言ふ俗信仰があつたことである。この供養には、同村内の關係から寶積寺が従事したらしい記録が同寺にある。

攝津名所大繪圖を見ると、墳丘上に石塔らしいものが描かれている。今寶積寺の記録を拾うと、延寶三年九月廿一日、智嚴和尚の時、扁保會塚祠を祀り、以後延寶九年まで毎年供養を修している。延享元年七月五日、宗海和尚の時、扁保會塚祠の修理を行ひ、供養を修した。文化十年、野燒の火で祠が類焼したので再建し、三月廿二日、村民集つてこれを清め、寶積寺から卒塔婆を建て、施餓鬼法要を行つてゐる。文

智嚴禪尼

化十一年五月十一日、智嚴禪尼入寂に際し、次の如き歌を残した。

ひゝきある松の嵐のおごそかに

千代の苔むすへほそつか哉

(八)岡本梅林

岡本地區の字梅林、藥師前、東山田池ノ谷、梅ノ谷、寶藏圖、長子、裏山、天王口、高井、中島、マンペイ、五輪場等を含めた地域に、大正年間の中頃まで存した。その起源を詳にしないが、山本梅岳の「岡本梅林記」に、羽柴秀吉が行軍の途上、岡本部落邊を通過し、軍兵の渴を止めるため、前に梅林あり、まさに子を結ぶ、甘酸啖可しと傳えたところ、士卒は、口中に水を生じ、渴が止つたと言ふ傳説を記しているから、かなり古くから存在したものゝ様である。安永七年歿した、蕪村派の俳人吉分大魯には

山本梅崖  
岡本梅林記  
羽柴秀吉

吉分大魯

この梅や摩耶ふく夕海にほふ

の句があるから、既にその頃は梅林として知られてゐた筈である。寛政十年に至つては、攝津名所圖會に、梅林の圖を出す程、隆盛となつた。續いて寛政十二年には、畫家淵上旭江により、その著「山水奇觀」に勝景として紹介され、いよゝ令名をうたわれた。當時の文人にして、この勝地を訪れぬ者はないありさまとなり、仙臺藩儒

淵上旭江  
山水奇觀

大槻磐溪は小羅浮と命名せる程であつた。中にも、京阪神の紳商に入門者が多かつた廣瀬旭莊の如きは嘉永五年閏二月三日、西宮の有志と共に梅林を訪づれ、その記事に至つては、當時觀梅客の姿を述べて委曲を盡しているから、次に引用しよう。但し原漢文を和文とし訓讀に便し、括弧内に私註を加えた。

〔日間瑣事備忘嘉永五年閏二月二日〕

午ノ時金城元眞至ル。乃チ途ニ上ル。京街濠ヲ過ギ湊橋ノ南畔ニ出デ、阿波利氏ニ攪ズ。尼崎舟ヲ買ヒ既ニ舟ニ入ル。西風大ニ起リ、水波ヲ逆捲シ、殆ト下ルヲ得ズ。逆川ニ入ルニ水淺クシテ舟膠ス。乃チ棹ヲ廻ラシ、安治川ヲ下ル七八丁、北折シ中津川ニ出デ帆ヲ揚グ。舟行頗ル疾然タリ。迂回スルコト數十町始メテ逆川の口ニ至ル。風益暴シ雪雲西北の諸山ヲ抹シ、寒嚴冬ニ勝ル。皆耐フル能ハス。屢臥シ屢々起ツ。(中略)戌ノ碑(午後八時)島田氏(西宮市)ニ至ル。主人酒飯ヲ供シ宿ス。三日、金城元眞ト主人ノ爲メニ書畫ヲ作ル。眞多長左衛門詩及ビ益壽糖ヲ送ル。昨夜聞ク、尼崎候令日ヲ以テ、岡本ノ梅花ヲ觀ル。故ニ他客ヲ禁ズト。乃チ四日ヲ以テ往カント議ス。今朝ニ至リ聞ク、尼崎候止ムト。乃チ午時(正午)往キ觀ント議ス。午時ニ至リ、主人客有リ出ヅルヲ得ズ。鈴木唯七

紅野平左衛門、眞多長左衛門、松井和三郎、久井太郎、右衛門、松本彌七郎、坂井昌伯、早馬吉左衛門、角屋利兵衛等、余輩に先導ス。門ヲ出ヅレバ、西風迅烈、飛砂面ヲ扑チ、海面ヲ望メバ、暴瀟山ノ如シ。鷗鷺棲息スルヲ得ズ。悉田間ニ集ル。幾十所ナルヲ知ラズ。殘雪ノ如シ。然レドモ咽喉噎塞シ、殆ト呼吸スルヲ得ズ。屢人家ニ避ク。又屋覆ランコトヲ怕レ、輒チ出ヅ。帽紐ノ垂ルル者面ヲ扑チ、疼甚シ。兩袖膨脹シ、鳥ノ翼ヲ張ルガ如ク、縫罅忽チ裂ケ、掀翻シ聲ヲ成ス。余謂ヘラク風聲既ニ極ル必ラズ、雨フラン、若カズ、暫ク憩ヒテ變ヲ俟タンニハト。衆疾走ス可カラズ。岡本ニ近ヅケバ、衆已ニ先ヅ行ク。彌七郎余輩ヲ導キ、路ヲ失ヒテ向フ所ヲ知ラズ。忽チ一僮有リ出デテ迎フ。蓋シ井上藤左衛門遣ス所ナリ。梅林ニ入ル。素キ者悉ク開キ、淡紅ナル者未ダ開カズ。岡頂假屋敷所ヲ設ク。蓋シ尼崎候ノ休息所ニ備フ。今朝小太郎人ヲシテ吾輩ニ報ゼシム。將ニ土人井上太郎左衛門(増田ノ誤カ)井上藤左衛門ニ至ラントスト。二子既ニ席ヲ設ケ、麩ヲ敷キ、□ヲ以テ方坐ス。忽チ見ル一片ノ白勢、空際自リ下リ、埜ニ彌ク林ニ互リ、萬箭ノ亂射スル如クナルヲ。稍梅抄ヲ過グレバ、濛々然ト鳴リ、既ニ頭上ニ及ベバ、則チ霰雨齊シク至ルヲ。衆蒼黃措ヲ失フ。藤左衛門ノ家人傘ヲ送ル。數人一

紅野平左衛門

傘ヲ共ニシ或ハ氈ヲ破リ被リ走り下リ藤左衛門氏ニ入ル。岡頂ヲ去ルニ丁許リ。小太郎ノ方ニ至ルニ會フ。皆濕衣汚糲ヲ脱シ坐ニ就ク。紅野平左衛門傳厨ヲ供シ主人モ亦蕎麥ヲ供ス。須臾ニシテ兩止ムモ風威未ダ衰ヘズ。余醉ヲ以衾ヲ借り假寢ス。申ノ下牌又出デテ花間ノ路ヲ取り岡頂ニ上ル。途ノ古塚、巨石重架シ屋室ノ如シ。黄昏來路ヲ取り官道ニ出ヅ。小太郎預メ轎夫ヲ使フ。余獨リ轎ニ上リ先ヅ行ク。戌ノ上(午後八時)牌島田氏ニ歸ル。歸阪後の旭莊は紅野平左衛門の好意に對し、次の一詩を贈つて之を報いた。

今贈良醞載歸舟 昨賜傳厨岡麓遊

看盡梅花三萬本 更乘醉夢到羅浮

右の文中において特に興味をひくのは、梅の谷にあつた古墳のことである。「屋室ノ如シ」と言う表現に依りその横穴古墳なること當時既に露出していたことが知られる。文中に見ゆる尼崎候の觀梅は、しばしば行われ、野寄の高井家等は休憩所に當てられた。次の史料は年次不明であるが、梅林御遊を報ずる、尼崎藩郷方役所の先觸である。

以手紙得御意、然ハ兼而被伺出、御隱居様御駕籠ニ而彌明後十三日岡本村梅

梅林御遊  
尼崎藩郷方役所

林へ明ケ七半時之御供揃ニ而被爲入候間此段御承知可被下、尤都而 殿様御出之振リニ而御沙汰有之候間別紙書付之通村繼ヲ以相送り申候間御受取互御取計可被成候右可得御意如此御座候已上

四月十一日 郷方

高井宗官殿

尙、別紙之通御人數先荒方申上候尙又御承知可被下候尤田中宗七殿忌中ニ御座候へ共相伺候處御免御聞濟有之候間明後日ハ梅林へ罷出候様宗七殿江右之趣御通達可被成候以上

覺

御次御供

十四人

御臺所

九人

御次合羽持

貳人

御用物持

貳人

御茶辭當持

貳人

御水桶持

壹人

手替り

貳人

大國隆正

舊曆四月と謂えば、もはや梅花は散り失せているが、なを一日の行遊が行われたことは、この地の勝景に心惹かれる者の多かつたことを想像させるものがある。國學者大國隆正が

岡本の梅ときつゝ來て見れば

梅の中なる岡本の里

と咏じてゐるように、全村の各戸に梅樹を有した中にも、廣い梅園を所有された人々を擧げると次の通りである。

増田太郎右衛門(字梅林其他榊井庄助)字東山田字梅ノ谷(乾喜右衛門)字高井増田文三郎(字寶藏圖附近)本田久右衛門(字高井)本田又兵衛(字高井)垣内重右衛門(字梅ノ谷)高井(字)七兵衛(字)梅谷(字)新左衛門(字)梅ノ谷(井)上藤十郎(字)裏山(字)長子(中島傳兵衛)字藥師前松谷重郎(兵衛)字東山田(中本喜平太)字高井(中谷新右衛門)字高井松田小左衛門(字天王口)西田吉右衛門(字藥師前)西村市郎(左衛門)字高井東谷達次郎(字東山田)前田安兵衛(字高井)佐海谷甚三郎(字中島)田村與宗(字中島)中林與右衛門(字中島)中島安右衛門(字中島)等である。

明治維新後は、鐵道開通と共に、非常に觀梅客が集まつた。住吉で下車した行客は、金蒔繪の人力車を驅つて野寄から、五輪場筋を上り、字藥師前に到る者があり、歩行しながら、字高井の梅を賞し、天王口を通り、寶藏圖の梅を眺めつゝ、梅ノ谷から藥師前に出て、梅林に登る者等、思い思いに、一日を送つた。花期に、岡本へ國鐵が臨時停車場を設けるに至つたのは、明治三十年頃から、明治三十八年開通した阪神電車が阪神間の行客を吸収し、青木停留所を中心これを運んだのと相まつて、岡本の觀梅は、阪神間における年中行事の一として名を知られた。

岡本梅林中の梅樹の種類は多種多様であつたが、次の如く分類される。

五輪場筋

白梅養老、白玉重五郎、はむめ、紅差、甲州野梅、  
紅梅豊後、摩耶りんしゆう、寒紅梅、唐梅

以上の中で漬けて優秀なのは、白梅では、重五郎、紅梅では、りんしゆうである。と稱せられた。「唐梅」は、岡本の特産として知られ、食用には適しないが、紅の原料となり、媒染劑となつた。當時岡本地区から出す梅は、年産數百石以上が普通作であつたと  
言う。

二月十一日の紀元節を山開きとし、三月中旬を山終いとした。この間一箇月は、茶停が建並び、梅花の枝、梅果の焼酎漬、鶯餅、梅菓子、梅饅頭のし梅等の土産物を行客に勧めた。「梅は岡本、櫻は生田、松のよいのは湊川」と諺はれた名所も、生田の櫻が先づ失はれ、湊川の松續いて姿を消し、今や岡本の梅も、字梅林の住宅地内に二三を餘すのみとなつた。(参考、鹿獄光雄氏、小羅浮)

#### 久保久良神社遺蹟と遺物

保久良神社の境内一帯に彌生式時代の遺蹟が発見されたのは昭和一三年のことであつた。神社は六甲山の南縁を形成する斷層崖の中腹に舌狀に突出した部分にあり、現在磐境といわれて、その名の示す如く石英粗面岩の露岩が境内一面に

磐境  
石英粗面岩

群在している。遺物は此の平垣部及び西南斜面一帯から発見されるが、殊に平垣部の中の西南部すなわち境内參道の西側に多い。この部分は昭和十八年京都大學考古學教室小林行雄氏によつて發掘され、それ以前にも境内の整地の際に遺の出土を見ているが、一〇—二〇の薄い表土の下に數十纏に及ぶ豊かな包含層を有してゐる。一方西南斜面では、地面の削平工事によつて遺物包含層が露出されたのであるが、約一米の表土下に數十纏の包含層が、斜面に沿つて存在し、遺物の量は前者ほど豊富ではなかつたが、前者より大形の土器片を含み、ことに磨製石斧及び銅才が、その一部で発見されたことは特記すべきことである。

磨製石斧  
銅才

彌生式土器

次にこれら出土遺物について略記しよう。最も豊富な遺物は彌生式土器である。それは赤褐色乃至灰褐色の微密な粘土を用いたもの、ろい土器で、壺形、甕形、高坏形、器臺形、臺形、無頸壺形等の種々の器形にわたつてゐる。壺形土器は主として、球形に近い胴に、漏斗狀の頸部を付け、口縁部及び頸部から肩にかけて華かな櫛描き狀に近い胴に、漏斗狀の頸部を付け、口縁部及び頸部から肩にかけて華かな櫛描きの直線文、波狀文、簾狀文、羽狀文、斜格子文等をめぐらしたもので、この他に口縁及び頸部に凹線文を施したものも多い。中には漏斗狀に擴がつた口縁の先端が更に上向きに立つて、頸部に廣い指庄粘土帶を一本めぐらしたものも発見されている。